俳諧第一義集

坤

俳諧第一義集之坤

鼻中庵三力著

水音大悟

古池や蛙飛こむ水の音

轉る處實ふ能遂ずして意休說ゆくとも道解乃句悉く自得して心眼を開ふ行ぐ正諦第一義ゆゑ

なし沒蕉翁枯野のもゝ歸元一路ゝ共日釈眼あふ在せりとく對面して徹底天せよ周ゝ智閑禪師擊竹悟道を偈ゝ曰

一擊小所知と忘ず更ふ修治を假ず処ゝ蹤跡なし

声色の外威儀諸方達道の者尽く言上々々

此意味なる仏祖の言葉は水なり流れ辺は味なり所は古池と
二義二義を重ねて一句成す其第一義を知らば祖師の胸中を
知るべし。孟子の所謂其心を尽す者は其性を知る其性を知る
則は天を知る と都の者〻学び彷彿と聞く所なるべし人
第一義諦と云ふは一物生じて衆理を具へて生ずる事五大
五蘊躰の如く今一つ云へば具へ作りへ故に
多く俳諧を集め種〻の理を尽せり。ばせを翁の句を窺ふ
事能ぐ知るべし。ばせを翁は素より五蘊皆
空なりと云へる所謂以心傳心微意浮言抄か

きゝ作りぬ備又陶淵明が詩小菊を東籬の下に採悠然
として南山を見るとゝ云へる。麻大師の直指見性心合〻〻
後の人陶達と号しとやらし何支那の人天理自然
と備はれり。あゝ悲しかる妙境を聞人のみ多き其名事代
砂なりとく腹を味べし且和歌にいとより句者といへん
こゝぞ〻と古人を云へる成るべし俳諧は発句附句の働
又肝要なり自性を知る事を知らずいたづら草木四季
と違へる花実実る小同。西行法師むかしの勝り出る者ふ
嗚〻外のゆゝべ誰教へるとなく自性の
なんとゝろ知る小。知きりふ何ぞ知ざる我人多知霊と

人どの受者の識は蘊る自性の本来を知るのみ
なれども知るを以てあなかちふ知るといふ沒。知りてよく行ふを
以て知るといふ大學の道は明德を明らかにするにあり
明德則本性なり是を修ふ見聞して又民を度せしめ
ると明德を又明らかにする民を親まるも至善に止る所を
ざしい真の明德あるこのふもるのハ所ず大悟發明しても其
ゆく行ひ所ゝうざしく盛德の君子といふべし又行ひ所
善に止るも善あり忽不善に墨の武帝初祖大師
に問て曰朕普く寺を建僧を度し布施し齋を設ける
功德あるや。祖のいはく無功德。帝意休しく考へ

武帝は当世の賢王なり答へよ然る風
はなはだ盛なる戲てよるべき董仲舒が非を後悔せしたるも
なるに至らざるを止るべきを一度見性せば第一の法を識る
乃根ハ鄙なれど詩歌俳諧の奥儀ハ及ず蹴鞠茶湯謡
舞伝傳授も醫術劍術馬術も皆是性理のさと
りなり。自信者ハ人を恐れを信ぜず異端も皆是性理
疑者ハ人を恐れを疑ふ外に孔孟聖賢も
何を恐れ疑ふ思惟ふ

名月三章

甚角

名月や池を矢ごろに切りておくすべし

或説に月は鮫くらうを嫌ひいつしか巡りも思はぬ事

我無心なりて移るきぬぎぬの池を矢ごろに出る句毎も書ながら

こゝをぞ思ふのこゝろは末代の名句と称すべし此事無心と

評ぜり心を尋ぬるに事本来一物なりて。何もなれば一偏に

心なりぞ。しかれども無物見くるしく大ひよ嫌ふべし馬祖大師。百丈の

鼻頭を拗る。丈。痛声を挙げて。丈大悟せりと。此方

無物こゝろ為べうぞ又思ふこゝろは物の心ぞ

こゝを評ぜり是は論ぜるに非ず非也。化して名句にいふを性

理に合ひる様云てり依て性體の句は言語を絶して

聞べし。爰に芭蕉沢池矢ごろを愛宕山に詣で湯に浴

出る所矢ごろに俗説あり又猿沢池めぐりとて此池を

一傍巡りめぐる所饅頭を三つ喰ふ。かくとて異ドあり

事行。こゝは廣沢池一章にて月の移りまぎれ池を矢ごろ

にをよぶを評ぜり。此説佳なれ但池を主にして

かゝるに月ごと言外の迷惑にて健天の史実矢ごろ

朱文公歳我に延ず鳴呼考ふる暴誰が怨ぞ

めくらぼうの暮しかくても月日は流れ過ぬ

次又黄昏無常の偈。此日已過命即衰滅なる夕べ

の魚のめしかくて月は流れ時よりて迷

情なり斯ならね侍れバ。うつゝの池をめぐるともしれぬなごし。月も池も我も即今五行の一精一團にまろびてめぐるよりの面白のありさまやとなり

くる／＼と堀江の鴨の浮巣かな　支考

水上に浮べる身の道の痕こそ見へ彼道ハ遠へ及ぶ身こそ不易なる浮巣なるに。めぐり行なき身のはかなき行じ浮身の上はめぐりて車のいつまで我身世するを詠せまふと行りしらんだくとも味ひ知るべし

見る人も廻り燈籠に廻りけり　其角

是も見る人が走馬燈のまはるに付て迴りなど。同じ所

をめぐり見て何の興やあらん。句の趣味ハ見る人の動きて何かず同氣相求めて主人公のめぐるをさとり別池をめぐりてとも見るの感情一致なり

其二

名月や畳の上に松の影　其角

此句一通りにては何のわけもなく聞へ侍れ共もとよし紀妙吟なりとおもふ月の影に霞ほどざるハなきこと是を名月と云ふ松影と寄せるハ限りなきに似たれども是ハ目前の曲節なり。此明月と云ふハ面の本智にてたとへて所有形の次物を移せる佛の十鏡に喩へ

はなるゝも此意味なるべし程子の所謂明鏡止水とも
これなんか是をうつしみる物ハ備はる両の眼と心の目其主
とる物を知る汝主人公を知る時ハ目なくして見鼻なくして
嗅耳なくして聞口なくして物の味ハふものとぞかく眼耳
鼻口にかゝる事なく自性より衆理を具へて萬事に
應ずる所なり其本善の心徳を自得せざれハ此妙處
窺ひ知りがたしとなん

我見る目も鼻もありや花の色　嵐雪

是ハ小町の画讃なり句の心ハ眼鼻なくて花の色
見る事ハなりがたし筆法にも月無まぎれ目にくゝ見る物ハなし

書ても又紙にかゝれた烏の声をきかんとすれバ生まれざる乃
又でいふことのかなしさ古歌の心をも味ひ知るべし是肉眼
其すがた見えぬをよく見るこの先ッ本文の月明に松影のうつるハ地上と
あるもおもふべき心思ひがけなく見れ上にハ晋子が良能と云べし
徒然月をうつせる松も互に思案も別ハなし又陰雲月を
遮る時ハ忽もなく跡もなし晴ぬれバ直に生ずれの
月より影を生る事とはり汝ニ松ひとり形を徒然も何れ
我よくよくして我本智も郭のごとくいふべからずも名月
やなどと観想の清章なれど末代乃秀逸と称る所なり
十縁生句に月の出ざるを浮み出でて是も月に影像

を現ずといふる對義は意に同じ。古人の詩に高山く
書をしるすも又佳なりそれ境に随て縛どといふる古語の
ごとく合へり

其二

名月や柳の枝を空へ吹く　嵐雪

月八千口の池に印をとゝめども唯てらす。心も亦変羅樹
象を物ぶといへども二つはなし。大空に月を観ぜば時空
の月は水に宿る。水に宿る月を人見ば忽水中の月の三自性を
仏菩薩に物ぶとは仮又物に止るものにあらず唯てし
のみにて他にあらずして忘れ去れば空の

めし嵐雪は一章八句より水中の明月なり。ふかくとなるべき
隅なく無次第の月を観じ悦然として水上に浮ぶ事を
知るべし又大空にも思ひべし唯其時は自性は月と一躰なり。
加る時八色和ふ著なるものの有べし誠に此神の風空へ
吹ふあしび唯水上に月のかゝへ吹おろす風なれども
代念形へ見えもしらば水中にある事を忘れて極の枝を
空へ吹上る後と思ひべきと云へる諸的の心をもあり。其の時
上にも下にも思慮分別はなくしべども本来月は大空にて
ひるまなしで夢うたゝもの。月こそ空を抜け自然乃道理
なり。暫く我相を離れこそるべきと云へるんべなり。水といへども

一潭の月なる事明白なり

海へ降る霧や雨こそ浪の音　其角

うしまこと端的なるこそ思ひ合せて考へ。此外いろくの説ありといへども皆いかにも雅かなるひがごと。人未石ふ

いかぐしなぞ叫る至妙なる境も情くなるべしなるべ有べうべ且故を温く新を知る俳諧なれば流行なるべし

るは奉ぜる時の轍鑽とて大ひなる事。故とハ

師より聞とる法なり。新とは我発明なる不の新向

なり手ぶり業なり世法も復かく新なるべし

四臨一智

うるはしくなる事なくも勢くや律なる耳　其角

画讃なり句意なるハなるべくも著てくなるひを感て。有情

もべて働くなるハ是什麼。をのづから〳〵少て或ハ強力或は

微力なるとなるべくも其力とるなる物も行とるなるんと此一物を考

乃〳〵是無一物なる中乃一物〳〵湯々なる呼吸のとなる

言語なるとの喩へなるて其呼吸も頂々もいうなるもと

推とも去ず換とも考べぞ。て力のなるべなる又仏神乃

力と一槃なるいるもあるしども其如来を知べぐしハ行なる免

東形〳〵神道と我身ハ自六根清浄なる六根清浄朱ば

故ふ五臓の神君安寧なり。五臓の神君安寧なるが故に天地乃神と同根なりと云て、他の神と同根なれば我ハ是何ぞ佛と名く一切の法に於て顛倒せず真實に覚了する故に佛と名くと云て臨済ハ三世の諸佛電掣のやと説て曰く舎得せや。前念迷へば即凡夫後念悟れば即佛と。彼れ是ふ准て同一性を説のごとし形なる形ふ力ありて手足を働き笑ふ應じて自由を兼ぞるはいろ〳〵の物を業なりと。画る席に耳を動して。ひろく陽炎ふ暖なる情を述て飽情ふ言ぬくる一句を

舎しを誠ふ叫ぶ。一章なり〳〵

翁示門人六章

稲妻ひらめき〳〵ぬ人待ちそよ

詞書ふ青淳大徳のもとにひとりの世ふ法ふ問ハ

ゆやゆしく大ひなるもむ。磨大師ハ不識と答ふ如く

世〳〵ハ智識も悟ハなり。古渚ふ問東便乃答西

といふやく稲妻と言せてぞ。ぬとうる句中ハ最早悟

りなるといふ心ぞ。覚ぬれば。ぬむ〳〵赤子乃心

なりそ。〳〵なる人ハ誠ふ貴ふしとなり

南天は実を包みやすし　一の孝　其角

出る杭の打れず世俗はあり合せり中庸は所謂隠
るゝを見るなく微なるを顕なるはなしと其斯は合て
稲妻は句ふ思ひ合ひ合ひ切れて恵は世人
詞の花ふのゝうはりて御諸はかゝるごとくにづるすま
しきは人をなげみ大言を放ち高人を侮り蓋恵はん
なく辞譲の心なく妄性は奉を吾と墓はあてゝ煙草
をすゝめ吾居はゝくしく孝高ふ罵る我羅漢めゝ来る
道人と思ふ人の名聞をふくゝ法をの名奉利
麦を知ゝ衣食住ふ奉りとも。五節は塵を社中は筆

きぐいやゝて近ぶくるものも疎くなるを古象は生涯嵐
衣は移ふ立堅居山橋を拵ゝ。誉く諸門人は示し今又
文育短才は我ふ立ゝ拙り来ぐなのゝずやし御諸は
何乃為ふ学ゝ問ふ我先ぶ不極むゝ。遊興たゝ
恥ぐさゝうれい国は基ひなゝ道を学ふは天命を
辞ゝ山国ふ我過ゝ来ふ移いぐ。天命を考ふ。
むゝく。庸人の及ばるゝといゝ人形は夏来ふ暑と
知ゝ。五月は寒と知ゝり。喜怒哀楽の情は異ふは
移ふ変ゝ。ゝ。先知ゝ来ふ。安ゝ。是を知る時は
とれづゝ移ふ。移ふ時は物ゝ知ゝ道理なゝ

未哲の傷を衆生を導くに。表一通りハ常ならぬ。少し常ハ
沙門乃形状の心ばせ。西方を指さしを懐ふが如くに。
さりとて我家の業も常ふ俳徊をとゝ守り。鼻祖ぶ教へを
慕ふ心ばせまゝ行へバ道其中ふこゝろ。祖ぶ餘光を一見
識ハ立ぶ乱ものゝ。おゝ又かゞゝゝる雑誹師ハ
無論なり家語ハ日無識と同ゝ行ハ鳳の中ハ居ぶ
衣を汚ぶゝゝ時ふ臭を聞と。吉悪ふ心ハ移り行
ふ。ふ唱る事いつゝゝ分ハ行ふゝゝ共ハ兼てふ
實を心ぶけ我言を離ゝ。ゝ子の時ハ孝弟忠信の本
躰をもとめゝゝ学ひ出へき道程ふ行へずや

其二

愚ハくゝく荊をはうむ夢ハ
生ゝ死ゝまゝなれば皆ゝゝゝるゝ成長ふ随ひて七情
ふ闇ゝ中ハ妄欲ハ起し名情ハ郷り欲食過ぎゝ
生を亡ゝ多を傷ふものゝゝふ荊をはうむ者ハ非を去ざる
ものゝ形ゝ初一念の夢ハ遠ひ愚ハ入り荊を掴んで
のち悔て腸をかむも何ぞ及ぶ昭是七情ふ毒味さるゝが
如く形。醫書ハ曰内七情ハ犯さゝ外ふ邪ハ解て聖賢と
いへども必ず病ひるなり行ゝば七情ハ物ゝる天ハ雲霧風
雨を生ずるゞ如ゝ人の身ふ生ずるなゝて呼ばゞ聖人ハ天心乃

清ふして性を傷ずず。名利の病なれば小人の国に比をぐらべ
子路孔子に病ひを祷るに我清ふ子曰丘之祷久しき。
元来神明の心を心とせざる人は心とさまざまいなり天は雲霧の
病ひ日月は雲霧を汚さず雨を障ず常住不変
しを昭然たるべきなるべし。されば喜怒哀楽愛悪欲
をのく仏の用ひて天に雲霧の障るが如く理に行てい
みべきなるべし或は怒りて肝を傷る。喜ては賢を傷る
類ひ多く七情は腹を中性を除ます。百乃思ひ
百病我生じて我身に害をなす時は争心の用なる理を
いしん中道の理を知る時は絶今怒らずして怒る。喜怒り

心上に止ず。喜ぶべきことに喜ぶべきことに喜ぶ心上に止ずして
物皆かくの如く清まる時は胸中に病ひなく小止観治病乃
第一心を易て和悦とす行じ衆病即差と又黄帝雑忌況に怪を
見て怪ずれば其怪自壊といへり。世に邪神を有べし妖怪も
なべし。然るに邪神も妖怪もみな我心のなせるなり別に
なしなり。されいう我道の道に荊を入れて心を乱す
失ひ。野中の杉を高入道といやしみ。室火は家に肝を潰し。
山野の青磐形端は蜘蛛を人魂と消磐戈騰ぐ化仏
より其者に来る狐狸に惑ひ魔を見。あらぬ憂目を見。孫に賃僧
梓神に化して。逆ひまつりを加へ孫に金張衣

錢を棄て薬とする水ようかつて眼を
洗ふべし。皆是妖怪邪神の業ふる所己が心の顛倒より
影ぞ。汝幸にはあらんや。たゞひとり知る怪きを出ずること。
これ即我が心の変化なりと覚る時は妖怪形相と
一郷みてこれを一如いかゞ。我〳〵妖怪と一体なれば又何ぞ怪
事あらんや。初の如く本性を守るべし。甚怪自壊るべし。
爰ふ又性とは人の本性を云ふ。是一理なり。心に善心悪心の二つあり。
これを心と云ふ。人物ふそむうる性の異なり。人心と云ふは多形千
化を起すを云ふ。故ふ善ふもうほう悪もう
はまり。此人心是性なる時は即菩提と成ることを知ふ

こゝるなりなんて我人菩提ふ人ぐ死て後の吊ひを待ふ
思ふる業ぞ。都てこれ人心の私なり。菩提ふ涅槃ふ般若と
ふ皆ふ心の称号なり。色界ふ色ぐ人心ふ色ぐ
移ふこの念ふいざなふ一念激て活なる鬼魅の心也
鳥獸の心を変化ぐ。されば人面獸心も説ふ一つ。
ふ死ても所謂石も朽ず。遊霊も成べし。此人心ほど
世ふおそろしきものはなし。故ふ色界ふ着せば五の鬼を
ふろし。ふつは善を排て一ふび地獄ふ堕ふ分を知べ
又ふ願力次第ふ堅固ぐ〳〵なる故ふ世理ふ従ふ
少人をさして死ふ刑を掛む罪ふ七日の

物ハ蘊もて身を損ふ事なれ

其三

花を吸ふ蛇なくひとり友とし兄

天地ハ多物ハ吐くを多物を吸ふ蛇と大虫ハ小虫を喰ふと

のゝ心ハ保食神の口を味ふ人ハ忍ぶ地の罪

人ゝ多るべし世ゝ自得と説せり去ゝ各ゝの示教成べし

即今花ハ秘笑ものみて和をも風をも厭ふべきハ人乃

常情なるさゝ蛇を吸ふ蛇を悪てこれを喰ふ雀を養る

ゝ衆俗の常ハ是ハ翁の意ハ花を損ふ蛇ハ人ハ

一虫の命を法ゝ為なしい牛馬の血を吸ひ若ゝ人ゝも

健なる雀ハ食多ゝ多ゝ鳥なる色ハ其蛇をくゝ食ふ兵飢死ハ

有まゝ死ゝ智ハ及ぶ所を見ゝ又友雀ハ

多物一体の道理ゝ浮ひ蛇も雀も人間も一体の友ゝ

なゝ食ゝ嘆ゝ友食ゝ食ゝ食ゝの調ゝ世ゝを人情のゝ

ゝ自ゝ受て自得ゝ題せるゝ晋子ハ言を諭しゝ

嘘を嘘ゝ猫を紙るゝ猫ハ

是則鷹ハ小多ゝ鳥ハ蛇ゝ陸を喰ふの影ゝ制

せゝ彼が命を法ゝ為ゝ事能ハ喰ふも喰ゝも皆天地の

物ゝ罪も深ひもなゝ人ゝ為ゝ命をゝ為て

陸物ゝ人道ゝ人ゝ猫ゝ猫ゝ紙ゝ育ゝ

其角

可愛ハ蜂の命なれ共、うんまをも喜ぶべし。彼蜂その道理ハ知らざる迄ハ猫と云ふ物ハ罪科ハ無し。蜂ハ一群と云へども人ハ蜂中ハ霊物と小て此を見へ、ふ蜂ハ物なれ共、猫ハ人を殺せば是の重極をかぶる。故ハ人を殺し、多獣を食ふ。其是程をぶてくるし。猟漁もせの心ハ同じ。生ハ多しい云へども更なり理り當ざ、ハ茶菓も食ひ伯夷叔齊ハ創義ハ義を死ハ是禽獣と同じかざる人間乃道ハ一命ハ大事ハ小事を食ふものなれ共、ハ知てハ大ひに仁の道を学ぶべし。友雀の句ハ思ひ合すべし

其四

蜂鳥ハ去ぬ花ハ行く秋の空

月ハ桂の花とも先ハ普通なれ共、又月を称して花と云ふ。みちかけ、生蓋句ハ本味ハ仏愚を悔ふハ本性を花て此ハ。然ハ空とハ天地を除漠なれ共、仏世人の情ハ我形よりまで ひて見ハ始めて我見ハ如くなる人事を形ハ無ハ多く、ハ非ず。死ハ蓋無ハ風の春ハ有為ハ物変と悟り。雷光石火乃うげ、ハ人ハ生死の苦楽を知るべきハ或時ハ穂義ハ東風ハ義ハ知ハ。明月の西ハ山ハ入ハ、ハ入ハ、ハ。若き ハ よろこび。老を愛ハ、ハ又心の用ハ、ハ。ハ、ハ。ハ、ハ中道をゆく風雅乃肝要なるべし

年々歳々花相似たりと云へり。されば春は山櫻もむかしの色にかはらず是則人間ドウザンも同じ姿なれども形は次第に変じて人の力は及ばざる葉をふるひ枝を枯し吟へよ見ふる人の花を惜む同じ天地の間に白髪を変じ花は色を変ずと云へる人成し或人此説を聞て曰形なきものは生滅なしと云へども一種仙人と云ふもの有り彼を称して長生し世に存ずと答て白古昔より天仙地仙は從あり霊丹を服し形を煉て天仙となり戸解して昇天自在の事甚だ多し山にこもり仙人と成て居て人間を捨て山林に入り五穀を

絶て行ふ如物を食し。我独り生死を免れんと貪る不仁の大欲論ずるに足らず弥長命を願ふ者は滅せざるべからず

雲霧何ぞ形を同じ事　堅城

仁者いのちながしといへども是を試知るべし人々の業に従て種々煩悩の増長を計へ

又曰業石発火月中に河有り河上に桂有り高さ五百丈事千一人有り姓は吳名は十六仙を学びて変ずるを是如何

答何人か月中に入りて桂を見て性の大なるを吟へ

小見の眼を開き人が為に教へ

不生不滅は天心をさとりて立る物也。佛説は切利天中千瀾

浮樹なり一名を波利質多といふ又は龍樹ともいふ高さ
八百四十里樹陰月中に現ずと是れ遠きにありて心
眼をもつてみるに闇かるべし。植ゑざる花ならば心に
味ふたとひ其樹を鋸もて剪ても剪とも得じ。石を叩て筆と
なし木の葉を拾て銭となし何ともせん皆是幻法也。
近世の俳諧多くは斯の如く異曲をもとめて實を失ふ
過をしらぬ詞をかざりて小人の眼をくらまし一時の顔なるは
則幻化乃仙法をとりやむを得ず。野狐精を信ずるに似たり
無文是貴人也釈尊も阿羅々伽羅摩の仙法を見捨て出法
をたておこひぬ。歴代の明王聖主も夢く用ひ玉ひて唯致人で

天の命にまかせなど生涯安穏なるべし

其五

物いへば唇寒し秋の風

四十九年一字不説と宣し道理も仮名一つ直なるが
よきにあらず直に着して風格をわするゝとなり。一佗ある
ものとはいへど一作も着してもつくしなりとも我からの妙も
角をとらふべきやうなし至妙の境は言句を離れて自得
せしとや。人の短を道ふなかれ己が長を説ふなかれと古語
の如し此句のかはりに書て机辺の柱に懸られたり。語は是心苗
なれば後世なるべし歌書に有文躰。無文躰とて心をいふは

にいひ何と涙中に白ひ情鏡つまる我有文といひ。趣意
を述る涙詞に顕れしる我。無文と云り。初学ハ無文辨
より入て。有文解にてもし悠まふ変へとえ。俳道未練乃
族ハ西風辨といへど。水臭く何の趣意も風情もなきさま
乃やうに思へり。邪路に何らざる也へ西風とは云ふなり。ち称も
翁が詞に何らし向ふより。いつしか名ある所之。無文辨ど
こさも捨ずれしども捨べきものも何らじ。柳ハ緑花ハ紅なり
とありては有文解のやうし。柳不緑花ハ不紅と示し
給ふに同じ是則柏樹子とも示佛ともいふ次の謂し然れども
庭前の柏樹子の佛なるともいへども実にともせで佛に

何らぬの心ねらん八。さらでも畠に引色もをといふん斯の
おもれの筆多し故に無文辨より学び入るべし文あらざる
変をも。一己の分別にこだはりて自得せりといふも何り。
あらぬる妄計の分別なり。ちづから慎むべきを戒へし

其六

我に似るなふ川よりつまりし真桑瓜

此句慈父の子に愛甚る深切も情を何うなし。都て万物一
躰といへども其中に物我といふあり何も皆二つに別るなり。
或ハ天と地と。是と非と。智と愚との数ひあり。陽に對し
て陰何り。悪に對して善何り。我に對して人何り。彼のごとく

自他の隔なくてハ四海兄弟物一とはなるべし。親子と
いへども心をもつく時ハ他人よりも汚まく陽ることを
離まそこく物ふ驚る時ハ草木國土一切衆和一躰なる
事分明なるべしとく似たる物を倚よ瓜を二つに割
ゆくとなり。紀人を似たるわざ。其家ふ世を業瓜
となるハ愚なる人なり。其愚なる所を見習ひて
物我よ隔を生涯此岸ふ逢へる事ハ眉目ゆくち
ちゆきなきを免。心ハなぐる賢者なり。かゝれよりつさば
移らざんと吉田法沙も書給せり。必しも愚なる
瓜ハ二つふなるべしとし

初雪や赤子よ見たる朝ほらあ　其角

是又瓜の示教よ對きべし一通りハ初雪の初なるとのゞ
ぶ赤子を結び侍れども。そ心のふうぶ大人ハ生赤子の心を
失ハぬと云るなく雪ふ対する我心の赤子ふ毛
て三てゞ。をれも我顧ふ対ふ成べし古今章ふ
門弟ふよ第て示ふ為ふ挙るものゝ都て
四曼の引句を無ふ合せ本来の意実ふ悟るべし
○或問性理ふかゝるハ皆名句ふて地の句ふ秀逸ハあらざるや。
答ふ曰性解ふ句ふも爽逸ハまし。なれども妄語よ為ふ
ふるなり又地の句ふも甚深微妙を述るふ一緊ふく

云べし〈問妄語ふ為るといふる証言ぞや。答妄語ね
さ為〳〵けうと云ふ変ふたる〳〵雨露の恵ふはうる〳〵
餅の花。此句ハ柳の枝ょ餅をつけ餅をとて餅掠みりて
とやすを云て。もべて草ある花ハ日月ふ為ふ雨露の
恵ふ花咲実ふる此をもち花ハ地しょ異ふ。雨露乃
恵ふはかべを一段出〳〵く空へ行をべて雨露ふ為ふを
かるべ物ハ先づ柳も生べ。餅ふる第ふ成ふまべ初ふ
第を釜ょ入る。ふと火ふて〳〵ふを和。印〳〵将ふて〳〵を搗。
餅ふなる八釜〳〵雨露ふ為ふ恵ふり。まく〳〵餅を柳ょつけて
花ふる八何物ふ業ふるべや。一箇の小天地ふる人の力を

かるふ力べや。さると雨露ふ為ふ恵ふはかるべ〳〵ふる是妄語
なり。猫を枝ふも雨露の恵ふ力べ〳〵ふ為ふ。但〳〵
火ふを水〳〵ひ為べ。ふ〳〵ふを道理ょ合ふを虚実自在
〳〵ふいふ為ふり。ふ〳〵八月為ふ初ふる那ふり此ふ為ふ付
べふ為ふる〳〵為ふる〳〵〈問いふるを地の句ふ秀逸ふ。
答〈月ふ為ふを為ふ鶴ふ為ふ為ふ晋ふ為ふる状
翁筆ふて。元朝の月ふ為ふ花やふ為ふて。長閑ょ逢云
なる為ふを為ふ為ふ歩ふ為ふ多。源石ふ為ふる猿蓑ふを
書為ふて又嵐雪ふ作ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
誠ょ私心を離ふ楼ふる人情ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ

貞室が「あをいくとたうり花のよう咲山吹」句ハ仏語新向七
なく切字もさぶうるぶしだも来代春易は秀逸なり是のよ
限を推て考へ又一字一作の扱ひも性霊の句も
なり此の句も初月の志ゝ丸白

注中よ宮業ひとり耐へ来る　嵐雪

ゝしなる此の句なるとも意味深長にして。ぱ〻ぐ考ふ
おかなふ事なり。郎のごとく耐へゝとなれば此の句又
答へゝとゝしだ道雅な句ふなるぱ言味をもて考へ。
耐へ来ハ塵なり。俗ふおらへ安いこゝらはなぐらふ叶の詞し
嵐をぶ悲へゝなれ。ほまりふ多をぶ〻すれば一度の耐へ。ぱたゝ

ゝふ霊亦乃寒ひとり花をも業ふぶよく耐へて春
との謂し切なる実情天道人合のべ。又業へゝとゝぬで
性雅な句ふなるとふ仏は。霊ゝよ向ひて師恩と思ハ一棒
一條の痕在ぶおく今程義言な問答。説ゝのちふ法ひ
ぞゝゝるんぶ〻なり。さ雅バ問ゝよハ祖義ふて業へ来る
宗旨なり此義ふ本来ゝ五ゝ有ゝ是ハ即實相ふて
我ん此業へゝるふ仏。何和ゝんと訳ゝ此潤をもゝ
霊亦乃宮業まづ眼なゝぶ。寒業ひとり答へ
ゝとゝ端的ふ人ゝ仏ぶ。霊ゝ知を其後詞よ解ゝる也外
ひとゝ乃花。ゝ此ふ。霊ゝよ何ゝ也。眼ゝふ人後のゝ

和泣中と云り。室家こゝろよと云。彼て答へ云と趣意
をはぶきて一句となれハ又甚後の。後の歌よゝ行れしかゝ
ゝ時無多多相めて玉世時を思ひ切て言葉同言
ゝ及ひ云ゝ云ゝ世尊一枝の花をやりて
著く大衆より見せ給ハ大如来ハ破顔微笑せりと。ゝ
理を責て云ハ問ハ花微笑ゝ云ハ微笑
せりとも云ゝ云ゝ問ハ能ハ如来微笑と語ハ者ゝ云ゝ
云ゝ案ゝ云ゝ著ゝ云ゝハ云ゝ云ゝ多ゝ嵐雪此意味を語
事ハ云ゝ仏世尊衆僧の耳ハ著やゝ云ゝ。此の句ハ句
を結ゝ云ゝ限ゝ此の句ハ秀逸古人今ハ云ゝ云ゝ

独ゝ云ゝ甚愛を見ゝ云ゝ時ハ拈ゝ云ゝ云ゝ云ゝ
云ゝ云ゝ云ゝ人の道ゝ人ゝ道の大本ハ云ゝ云ゝ
云ゝ云ゝ来を知る時ハ神仏聖ゝ云ゝ云ゝ云ゝ
仏聖の心ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ。神
三思一言九思一行ゝ云ゝ云ゝ
云ゝ所以乃法ゝ云ゝ。
学ぶ事。ゝ云ゝ今ゝ更ゝ道を聞事ハ。ゝ云ゝ
人ゝ云ゝ云ゝ角ゝ呻吟ゝ云ゝ。
誰ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ

布袋画讃

物ほしや袋はうちに身をもむ

きゝやうふ心俳の微意発明せんとなしば先づ布袋和尚
の袋のうちの身をもむ見るあて其家〳〵に応ぜふ通ふ
窺ひ心ぶとを受て意理を違ざれど心裏の宝を納め
ぶきを。其線の句意を〳〵郭然として三昧を。お
古池の句乃第一義諦を主とすべし心諦を自得せば
即芭蕉直指の門人と謂べし多ふ由我とする。おのれ
ひ進ぶく曰吾一智識の徐を得て頭ふ古池の句をも
りやせり直指の門人とふべし。答て曰賞家の若き

所を賞るとも俳道を大略一家の
愛ふ体学ひ。たいとう改るとい乃衣の油の染るがごく
洗ひ濯とも拭へ朴の生るがごとく。是全く徳学と俳道
別段のものいまだ心雅なれば。我と由て知ふ志
由我とハ何のものぞ。我と由て知ふ掩てはみるべいぶ。いぶ
其有我無我のさとりも至ざるの必とり形ハ土形り
名を躰とし即今布袋とふも名なれ名を躰とし
名ハこれ俗の物なれば吾名を義理を知べて古池乃
物語を窺ふ心ハ中〳〵紀貫見ちべ〳〵紀貫道を志
所ハ遠るふ程行まゝ有る。世ハ道をとゝみ却て嘲る

人をはるかに仰ぎ奉るべき物なれば、僧侶少しも
いとゝ尊き。備はる所の和尚を除く勅の化者なれども是も凡人乃
如くなるべし。思惟するに、翁が俳諧は性理ふ
かきものなれば、猶くほのかしらるゝ。所矣も。寂
みも。花も。うなるもはるもなし。皮肉ふ脩へて地に句をふ
道絶の句は骨肉骨なくして肉も補はず。皮肉なくして
骨を立てるなり。亦剛中柔の節をまもる一真にはぜ
事もはるゝ。そなを行らく真本を忘のるとや
いへん知るべき道を奥底は人毎に諭し。句毎に妙境を
吐ぐれども唯句ふなるべし。なのぐるを塵を掃じて

經宗を經をよみ。念佛宗は佛唱するばかり。新句と
吐。行解力なる則の念なれば。稚拙妄執を遁るべ
者なるべしを遁るべ我如なる所は事簡易にして
淳なり。至りいるにては体用一致とぞ。縁
經み昇を得るは皆資友の助なり。又魔を友とするは
益なりと孔夫子も宣へり。然ば世を捨る諸母士は義
句を友として行路自己の孤独をまぬかれ。紫藤と
顧ぶ。一言を発るべ。ふ子鑑を落し一毫
もなくば。唯理屈を離れて放心を求るべ
心風迷の俳を捨て俳を捨てづ

吳氏藏書

有一雅人曰三力舊長州人也弱冠而去鄉寓居於浪華遂止住于南都焉素嗜俳諧之道最志正風體嘗叩予柴廉數問禪頃著一書曰第一義集為其書也揉擷所膾炙人口芭蕉其角嵐雪野坡支考等之句意難通者以和解之往々

論諸家之所不及殆入玄理既是
第一義寧借言詮乎然後學輩無
筌何由得魚已得魚在忘筌而已
予時閱此書傍有人見曰恰似讀
禪書正恐齟齬於滑稽之意耶予
答之曰蓋芭蕉翁本曾參見智識
既闊一面目乃託意俳諧以自游
戲耳不然則鄙俗妄語兒何其至
取矣今此書以禪意諭之是其本
色亦何怪哉世終不能起斯翁恨
也後世淺俗奈解人正不可得容
乃伏退以是為跋

天明之癸卯歲春三月　相樂山樵子撰

寛政二庚戌年開版

書肆

京都 井筒屋庄兵衛
京都寺町通二条下ル町 野田治兵衛
江戸本石町十軒店 山崎金兵衛
大坂心斎橋筋順慶町 渋川清右衛門

社中藏